

兄妹アーティスト KANTA&KAEDE の特性に寄り添う個育で ～社会参加から社会参画を目指して～

輪島 裕之、輪島 満貴子

KANTAさんとKAEDEさんのご両親

①はじめに

自閉症の人の困り事は生活場面のどんなところに影響があるのでしょうか。
それを見守る私たちは、その困りごとに対してどう対処できるでしょうか。
我が子KANTAとKAEDEの生活エピソードを通して一緒に考えていただけたらと思います。

②「見立て」と「手立て」

自閉症の人には・対人関係を築くことが苦手・言葉を文字どおり受け取る・視覚的情報が入りやすいなどがあります。
特性に合わせて環境を整えることで日常生活で不安定になることが少なくなります。これはアメリカ・ノースカロライナ州立大学で実践されているティーチ（TEACCH）プログラム（自閉症のある方やその家族を対象とした包括的な支援プログラム）を取り入れています。

③教育機関での気づき・葛藤

普通級・通級・支援学級・支援学校。選択肢があるように見えて、支援体制が整っているとは言い難い現実があります。

知的障害がある子供達の進学の節目のたびに親は悩まされます。知的に遅れがあり成長がゆっくりである中、進学か就労かの道筋を早い段階からイメージして欲しいと迫られとても葛藤しました。

目の前のことで必死な日々の中で親は将来を見据えてどの選択をする事が子供の為になるのでしょうか。

④「ちがう」ということ

関心あるものへは放っておいても追求していくのに対して、興味のないことに対してはこちらがどれだけ関心を向けようとしても向いてこない。集めたい・並べたい・ハッキリとした色合いを好む・・・。

興味や関心が狭く特定のものにこだわることや、感覚過敏があるという特性は、子供達のアート（表現）にも現れているようにもみえます。

⑤社会「参加」から社会「参画」へ

知的障害があり、自閉症がある子の行動は時に『変』に見えたり『外れてる』ように思われることが多いです。けれども、そこに孕んでいる力をちゃっかり借りて、子どもも大人も世界を開き拓げてきた幼稚園時代。

視点を変え、見立てを幅広く捉え始めると、そこはユーモアでいっぱいに広がったユニークな世界があります。

支援ではなくちがいを認め価値を見出してくれる人が増えることによって、知的障害がある人の社会参画する機会が増えてくる可能性を感じています。

⑥さいごに

知的障害や自閉症がある人たちの特性は障害になる場面もありますが、ちがいは可能性を秘めていると感じる日々です。

～プロフィール～

輪島 貫太 Wajima Kanta

2歳の頃、動物に興味を持つようになり絵を描くようになる。成長とともに落語・おもちゃ・トリビア・アニメ・みんなのうた等その時興味あるものを集合させて描くことが好き。頭の中の情報を整理するかのよう“もじ”で知識を書き出し、その数は300枚ほどにもなる。将来制作したいアニメのキャスティングやシナリオを考えながら日々創作活動に励む。

輪島 楓 Wajima Kaede

魔法や変身が出てくるおとぎ話が大好き。物語に出てくるモチーフを切り紙で表現。

最近はデジタルイラストも描くように。